



深町六年史(十一)

下組 小林 德藏

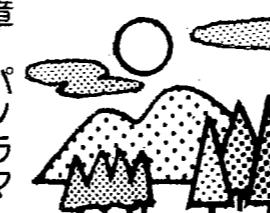
十一章 純繩力消失た

<p>◆◆◆</p> <p>◆◆◆</p> <p>◆◆◆</p> <p>◆◆◆</p>	<p>3 2 1 深町変貌の前触れ 4 3 2 1 山中學園より申し入れ 4 3 2 1 対応の姿勢に温度差</p>	<p>二章 平成二年 三章 深行型町内会機能不在 三章 深行型町内会組織の限界</p>	<p>4 3 2 1 安全な通学路を改修を 4 3 2 1 深町三町内会の実状 4 3 2 1 自治組織のほころび</p>
<p>上組、中組、下組各町組合を一本に統括する組織が必要。</p>	<p>深を過疎化する方策がわたりゆく社会情勢の広報</p>	<p>四章 子どもが減る地にするな 四章 深の慣行</p>	<p>三章 過疎化の衝撃</p>
<p>交通網の整備</p>	<p>町民大会の記録一抜粹</p>	<p>過疎化を避けるための 方策</p>	<p>過疎化会といたる組織の衝撃</p>

十三章 目次一覧(1)

第一章一覧を取り上げました。次に次章を設け、目次を時系列で描きました。パノラマを頭に描ががら眺めてみてください。

断りがあります。タイトルを一部変えて、本 文は変わりはありません。



深町が大変貌を遂げようとして、繋いた時期に、町内三町内会を繋いでいたのは、深町連絡会でした。ところが、その組織が一夜にして潰えるという事件が起きたのです。平成四年九月二十三日、役員会で起きた想定外の出来事でした。唐突に提出された執行部不信と連絡会解散の動議が導火線となりました。僅かに残つてはいる三町内の統合機能が消えては、深地域全体と限界を露呈した指導部の発言力は弱く、事は成就しません。議論(?)にもならぬ会議が討論(?)され、別組織を連絡会で到達した結論は、選ぶ人を選ぶ。新しく立上げる。つまり、十六章以降に、ここでは、今ましよる。このい件いうも、立ち上げる。ありました。

十四章 目次一覽(2)

さて、話を平成四年後半に戻します。八月十八日、三原市は山中学園理事長山中幸平氏が設置する防災調整池及び流末水路について「洪水調整池の管理協定」を締結しました。九月十三日、町民会館で山中学校敷地造成工事の説明会を開きました。学校法人山中学園理事長山中幸平氏の挨拶の後、説明が続きました。事業概要と経過報告は学校法人事務局長より。設計計画はダイホーコンサルタンクト(株)部長より。三広体工事説明は建設工事共同企業原島所長並びに清水建設(株)市役所店土木部課長より。市役所建設部長より。

654	3	21	654	321	7	654321
会山溝下中溝手組移転市長敬全員	開発計(株)手組市内会園に	七章 市長、市議会に 三原二	六章 あつと驚く大見出し 二中成町への高等學校を統合	三町内会長、市長訪問	五章 実連町明内会の行動目標	五章 平成三年 の架け橋
溝下中溝手組移転市長敬全員	画推進の指針 より申し入れ	発表 二年年來の課題 先検討始まる	新聞報道 が決まる	セントタリーより申込み	情報杜絶で混迷に陥る	情報杜絶で混迷に陥る
園に	三原ゴルフ俱樂部	発表 問題を発表	三原二	あり申込み	セントタリーより申込み	セントタリーより申込み
による下組町内		問題を発表	二	あり申込み	セントタリーより申込み	セントタリーより申込み

十五章 目次一覽(3)

7	6	5	4	3	2	1
進	進	山	中	地	新	深
捲	捲	檢	理	元	設	町
状	況	分	事	要	校	連絡
況	況	實	長	望	暮	會
說	說	地	よ	と	れ	会
明	明	元	り	行	れ	★
會	會	の	の	政	終	移転用地最終計画説明
(二)	(二)	づくり	の道標	の約束	設計図公表	★出席者名 ★地元指導
		イン	フラ	整備発進	如水館高等学校	★質問
		フ	ラ		溝手市長市政報告会	(感情的対立が見え隠し、求心力は低い)
		ン			島如水館高等学校	
					最終設計図公表	

①交渉県道改良について、三原市助役とする。②建設工事に関する事項は清水建設の放生会(ほうじよ)建設工事企業体会長。③中学校教育に関する事項は山学校園事務局長。④建設工事共同企業体から地元への窓口がなされました。地元を窓口となる「対策協議会」を設置して欲しいと、深町連絡会が早急に設置することを約束しました。

か釣多近をいねり  
か船仲友 か釣多近をいねり  
き子良遊少にり年のいう兄き あのかいびし來をと守るだ。弟だ。私は  
きの達中くタク所ひたんを私は  
え親。だ待たし四り。も長男の孫は十三才の兄が三才離れいよ  
るに子すつ時て年をすつてケい。夫いんの姉妹でお互いいいな  
な守つり夫いんの力もよくする。び守三妹てよ  
うなるとき上手あるとつ



「子守」

(元) 中組 塙見 博文

帝國集団操縦と空襲

中華書局影印

広がつてきました。でも、不思議なことがあります。した。それは、呉市はよく空襲を受けたのに、軍都広島市はあまり被害を受けなかつたからです。なぜだかわかりますか。広島市は、あの恐ろしい原爆を落とす候補地に決つていいましたのです。

昭和二〇年（一九四五）になると、一日に何回も、警戒警報や空襲警報のサイレンを耳にするようになりました。学校でも空襲に備えて、避難は近くの竹藪へしました。バケツリレーは、この時知つた消防の方です。私たちちは毎日、カバンと背負子（物をかつぐのに使う道具）を持つて登校しました。カバンを開かずに帰る日もありました。いろいろな作業がついたからです。そんな時、「勉強のがつたなあ」と思つたものです。本当にですよ。（次号へつづく）

